

第5章 妊産婦のリスクスコアと医療機関

妊産婦のリスクスコアと医療機関

1. 調査概要

1) 目的

分娩取扱い施設における、妊産婦のリスク特性に関する実態を明らかにする

2) 調査対象

病院

3) 結果

中林の妊娠リスクスコアを用いて、入院している妊婦のリスクスコアに回答した 212 病院のうち、総合周産期母子医療センターは 16 病院（7.5%）、地域周産期母子医療センターは 72 病院（34.0%）、一般病院は 117 病院（55.2%）であった。

平成 24 年、8 月 1 日（水）の日勤帯終了時点で、産科関連病棟に入院している妊婦は総合周産期母子医療センター16 病院では 210 人、地域周産期母子医療センター72 病院では 664 人、一般病院 117 病院では 746 人であった。そのうち、総合周産期母子医療センターでは超高リスク群の妊婦は 55 人（26.2%）、高リスク群の妊婦は 57 人（27.1%）、中リスク群の妊婦は 70 人（33.3%）、低リスク群の妊婦は 28 人（13.3%）であった。地域周産期母子医療センターでは、超高リスク群の妊婦は 87 人（13.1%）、高リスク群の妊婦は 177 人（26.7%）、中リスク群の妊婦は 226 人（34.0%）、低リスク群の妊婦は 174 人（26.2%）であった。一般病院では超高リスク群の妊婦は 41 人（9.0%）、高リスク群の妊婦は 80 人（10.7%）、中リスク群の妊婦は 217 人（29.1%）、低リスク群の妊婦は 408 人（54.7%）であった。

4) まとめと考察

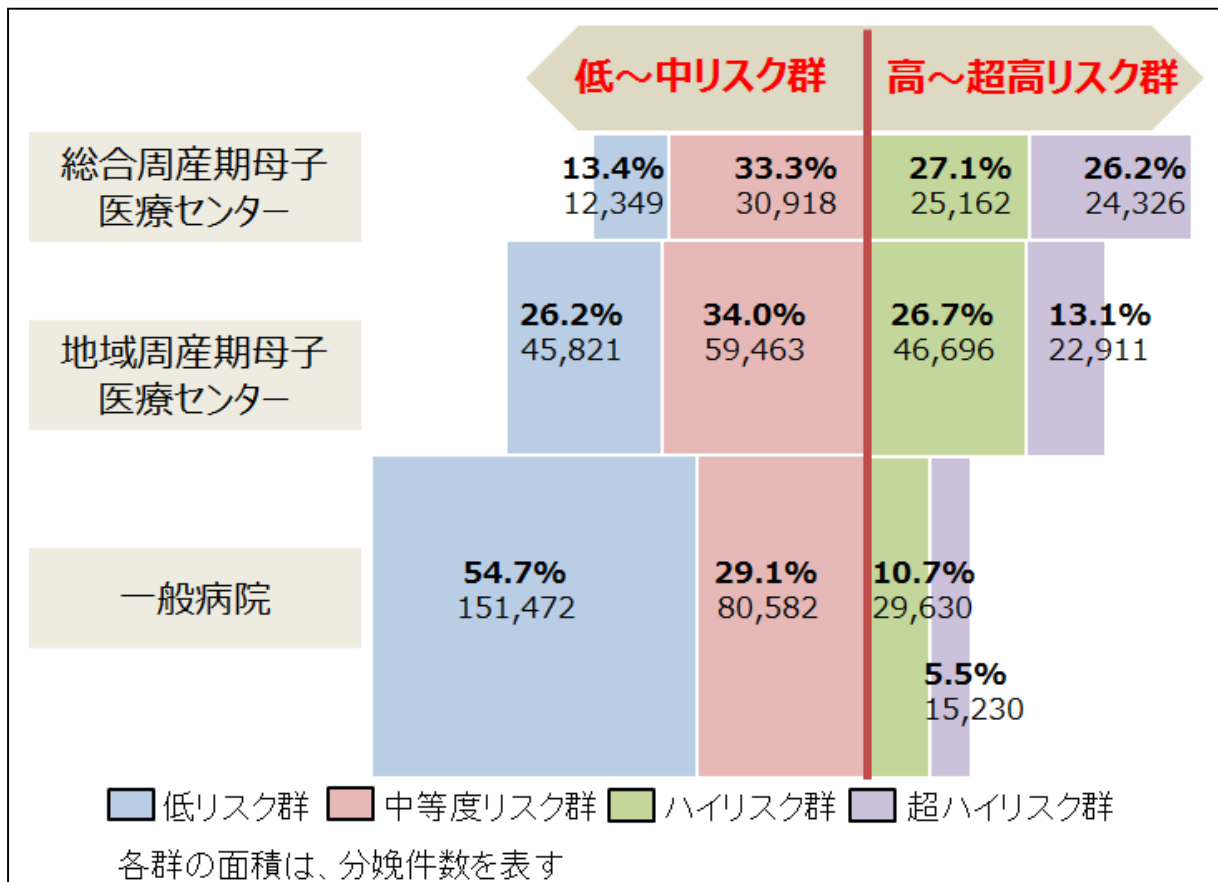
医療計画に基づいた周産期医療体制として、総合周産期母子医療センターなどの高度な医療を提供できる施設で、リスクの高い妊婦が効率的に医療を受けられるよう平成 8 年より整備されてきた。本調査では、妊産婦のリスクを中林のリスクスコアを用いて分類し、入院している妊産婦のリスクとその割合をみると、それぞれの医療施設では、その施設が担う役割に相応の妊婦が入院しているように見える。しかし、各施設の年間分娩件数でリスク別妊産婦を割り当てると、必ずしもハイリスクの妊産婦が一定の医療機能施設に集約されていないことがわかった。

今回の調査で明らかになった妊産婦リスクの割合と各施設の年間分娩件数に割り当てると、例えば総合周産期母子医療センターに入院している超高リスク群（26.2%）は 24,326 人となり、地域周産期母子医療センターに入院している超高リスク群（13.1%）は 22,911 人であり、患者数に換算すると大差はない。つまり、地域周産期母子医療センターにおい

ても、多くの超高リスク群の妊婦のケアにあたっていることが分かる。

一方で、地域の分娩取扱い施設は減少していることもあり、総合周産期母子医療センターでも低リスク群の妊婦（13.3%）は12,349人おり、低リスク群の妊婦にケアを提供していることが明らかとなった。

高齢出産の増加、妊産婦のリスクが高まってきている昨今、どの分娩取扱い施設にもハイリスク妊産婦がいることが考えられ、安全・安心な出産環境としてはよりケアを要するハイリスク妊産婦に備え、妊産婦のリスクに応じた助産師の適正配置が求められると考える。



【上図におけるリスク度別対象者数の算出方法】

本調査に回答した病院において、平成 24 年 8 月 1 日時点で入院している妊産婦を中林の妊娠リスクスコアを用いてリスク度別の人数を集計し、医療機能別にその割合を算出した。

2010 年の分娩場所別出生数の割合を用いて、2011 年の年間分娩件数に乗じて病院（一般病院、地域総合周産期母子医療センター、総合周産期母子医療センター）における出生数を推計した。その出生数に対し、本調査から医療機能別施設における出生割合を算出し、乗じることによって、2011 年の医療機能別施設における出生数を推計した。この出生数に対し、リスク度の割合を乗じて、図を作成している。